

大庭みな子

ふなくい虫

講談社

ふなくい虫



昭和15年1月20日 第1刷発行

昭和45年4月20日 第3刷発行

著 者 大庭みな子

発行者 野間省一

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽2-12-21/郵便番号112

電話東京(942)1111(大代表)

振替東京3930

印刷所 豊国印刷株式会社

製本所 鈴木製本株式会社

定 価 480 円

落丁本・乱丁本はお取り替えいたします

©Minako Ōba 1970

Printed in Japan

(分) 0-0-93 (製) 123541 (出) 2253 (0)

ふ
な
く
い
虫

装幀——栗津 潔
見返し写真——大庭利雄

「ある朝、目が醒めると、すみれ色の海の底で、自分の尻っぱを自分で呑みこんで環になった蛇の中で、裸で坐っていたのよ」とありが言った。ありの裸の膝小僧や乳房には橙色の黴の花が無数の小さなひとでのようにはりついていた。黴の花で蔽われていない部分の肌には沢山の紫色の打ち身があり、藤色の花のあふれている桐の葉の重なりを透してさしこむ朝の陽が、ありの肌の上に、めまぐるしく回転しながら当てられる照明のようにゆれていた。

「海の中の生活だって、地上の生活だって変りやしないさ」彼は眼をとじ、やがてまばたきをやめる朝の陽の中でありのからだに黄色くしぼむのを怖れていた。

ありの裸身をすりこんだフィルターが、こんなふうに肉眼にはりついてしまったのでは、ほかの女はみんな二重露出になってしまう。彼はありを見まいとしたときのことや、ありを見ようと、眼を見ひらいたときのことを思い浮かべる。彼が見た全てのかたちはみんな記憶の壁の中にたたみこまれてある筈なのに、ひきずり出して並べても、あつというまに、青や橙色の黴の花に蔽われてしまう。粉っぽい、ひび割れた、餅の黴のようだ。彼は拇指の爪で

黴のうろこをひきはがし、もろく、ぐさぐさになった餅の粉が爪の中にめりこむのをみつめる。

だから彼は花屋の職人の求人広告を新聞で見てその温泉のある島にいく気になった。それは世界的な観光地として知られている氷河で有名な湖の中の島であった。その島は氷河の河口の少し先の方にあり、島のあらゆる場所から噴き出ている温泉のため、そんな北の方にあるにもかかわらず、異常に暖かいのであった。求人広告を出している花屋は、温泉の熱を利用した温室で熱帯植物の栽培をしているのだそうである。観光地の客というものは、そういう場所で湯につかりながら原色の熱帯の花を髪に挿したり、正装した胸にリボンをあしらった花をつけたりして喜ぶものなのだろうと彼は思った。白夜の続く、ねずみ色の空に柚子のような太陽が氷河すれすれによぎる北の国の風景を思い浮かべて彼はその島に行く気になった。

といっても、彼は園芸科の出身などではなくて医科の出身だった。家が農家で少年時代、米や野菜や花を少し作ったことがあるから、何とかごまかせるだろうと思ったのだ。彼の家は彼が生れた頃はちょっとした地主で、番頭と差配を指図していれば、自分達は土で手を汚

さなくとも安楽な暮しが出来た。世の中の移り変りで土地を失ってから、食べるために普通の農家になったのだが、彼の父と異母姉は生れてから死ぬまで遂に一度も鋏を握ったことがなかった。農業の仕事は彼の母と彼がやった。彼の母親はずっと昔は半玉と呼ばれる色町の少女で、次に妾と呼ばれる小間使となり、最後に妻と呼ばれる下女になった。少年の頃は百姓は好きではなかったが、母が鋏をかついで野良に出ていくのを見ると後を追わずにはいられなかったのだ。棚を結った梨畠があつて、その下に食用の菊を沢山作っていた。香りの強い菊の花びらの酢のものを食べて彼は育ったといつてもよいくらいだった。

彼が大学に入つた年に母が死んだ。もともと彼の家は奇妙な構成を持っていた。異母姉のありが廃人である父を黒い僧衣のように身にまとい女主人の座に坐っていた。名家の出であるありの母が死ぬ何年か前から小間使として同居させられていた彼の母を、ありは生母の死後も召使としてしか扱わず、異母弟の彼をも下男としてしか扱わなかった。物心ついたとき、すでに彼の両手は後手にしばられていた、という感じだった。生涯愚かで、反抗というものも知らなかった母が死んだとき、彼の手首の紐はばらりと切れたのである。彼は生れて始めて両方の手を前にひろげ、奇妙に動く自分の十本の指を眺めた。その細紐は風化してすり切れていた。それは赤茶けた油のぬけた女の長い髪をよつたものであった。

大分前、或る社会の変革で、家屋敷とほんのわずかの農地を残して彼の家の財産は全て失くなった筈だったのに、ありが彼女の名義でまだかなりの山林とか宅地を持っていることが

わかったのは、彼がありと性的な関係を持つようになってからである。生活に困らないことがわかったので彼は百姓をやめた。彼は花を見るために梨の木と菊島だけを残して、ありと性的な関係だけに没頭した。ありを組み合わせることは権力と金をもぎとることの筈だった。だが、そういうふうにはいかなかった。

気がついたとき、彼は指先こそはいそぎんちゃくの花びらのように動かしたが、長い絹糸のようなありの髪で織った精巧な蜘蛛の巣に捕えられた虫であった。

ともかく、その温泉のある島の花屋の「園芸家を求む」といった新聞広告だけで、彼は今まで勉強した医学を放り出す気持になったのだ。

何処か見知らぬ遠くの町で全然違う生活を始めたい、という気分だったのだ。

というのはこうである。まず第一に、彼の父が狂死したと思ったら、異母姉が首を吊ったのである。父はもうずっと前からからだ中をスピロヘータ・パリダにおかされていて、頭には風にとび散る寸前のたんぼぼの白い毛のようなものがふわふわとしていて、顔には奇妙な赤黒いしみ、が地図のようにひろがっていた。死ぬ少し前には日がな一日松葉を集めて束にし、それを赤くなった炭火に押しつけていろりに線香の代りに立てるのである。松葉だから燻るし、その度にみんな涙を流して咳こみ、ありがいくらとめてもやめなかった。一度など是有りが猫を叩くときに使う新聞紙を長く丸めた棒で父の頭を叩いたほどである。すると父はひどく悲しそうな顔をして、「お前の死んだお母さんが線香を絶やさないようにしてくれ、

と頼んでいるのに」と言った。

いろいろには天井の梁から自在鉤が吊してあり、鉄瓶がかけられていた。そんな茶の間のある家は今では少ないのだが、彼の家ではそうしていた。それは茶道とやらをたしなむものの好みと思われた。松葉はときどき炎をあげて燃えることもあったが、大抵は黒くいぶって直き立ち消えた。すると父はまた立ち上って庭に新しい松葉を集めにいくのである。その中にひどく顔がむくんできて、吐く息が尿のような匂いとなって死んだ。それは夏が過ぎて間もなく、菊が咲き始める頃である。それからしばらくすると異母姉の首が吊った。首が首を吊ったのは庭の池のそばのしだれ梅の枝である。翌る年の三月の始めて、梅が咲き始めていた。梅は夜見るものだというのが、凍りかけた夜露の中で白い梅の花びらが光るのを、その二、三日前、彼は異母姉と一緒に泉水のほとりで見たのである。ありはその枝で首を吊った。沢山のひとがやってきて、ありの屍体を枝から下すとき、その白いはぎや、腰や、手や足の指先などがゆれているのが映っている池の水には薄い氷がひび割れていた。ありの足の拇指は内側に固く折りまげられていた。

きくところによると、ありの母も三十年前に同じ枝で首を吊ったのだそうである。だから、それは二代に亙る好みと思われた。

彼が医科の実習生の頃アルバイトをしていた優生保護法の認定医は非常に無器用な男で彼は中絶の手術を手伝ってやらずにはいられなかった。彼が手伝ってやらなかったら、かなり

の数の女が死んでいた筈である。何段階にも分かれている国家試験の最後の第一級認定医とやという大層な肩書きの試験を受ける頃、彼の堕胎の腕は名医並になっていたが、彼は国家試験を受けてまともな医者になる氣持を失っていた。大学の制度に関する紛争にも巻き込まれていたし、ありの記憶が、その制度の中で育てられた自分の技術を嫌悪する理由となった。そして、彼が手伝ってやらなかった町の優生保護法認定医という看板をかかげている医家から、白い布で蔽われた女の屍体が運び出されるのを見るたびに、彼は第一級の国家試験を受けようという氣持を失っていた。

あれやこれやで彼はその故郷の古い家がすっかりいやになり、遠くへ高とびしたくなったのだ。

海辺の或る飛行場から出る温泉のある湖の島へ行く飛行機はパイロットを含めて四人乗りの小さなプロペラ機であった。何でも時速が十七キロまでおとせる非常に安全なものなのだそうです。温泉のある島に滑走路のある飛行場が無いというのもその理由だったが、觀光地を訪れる金のある客達はジェットにあきあきしていたので、そういう飛行機に乗ると、特権階級だという確信を一そう新たにして幸福な氣分になるのであった。小さなプロペラ機は水陸両用のもので、車輪を胴体の中に巻きあげると、翼端から、フロートが出て海におりれる。

彼が飛行機に乗ったとき、他の二人の客はすでに後の座席に並んで腰かけていた。彼等は

夫婦者らしく、片時もそばをはなれられないといった風情で、びったりとよりそっていた。だから彼はパイロットの脇の席に坐った。

夫婦者の女の方はセーブルのコートを着て、同じセーブルの帽子をかぶっていた。二十代の半ばといった感じだったが、なかなか美しく、化粧の仕方も上手であった。口紅のひき方も、眼元の翳の入れ方も趣きがあった。肌はオリイヴ色で沈んだ光沢があり、暗く煙った腿をゆっくりと上下させて光を押し出しながら、翳った眼の奥でひどくふてぶてしくパイロットや彼をみつめることがあった。彼はその女にみつめられると、動物にみつめられているような気がした。女はセーブルのコートを着ているため、肥っているのか痩せているのかよくわからなかったけれど、男の方によりかかるように寄せた肩つきや、斜めに投げ出した脚などの感じから、しなやかにたわむからだつきと思われた。

女は男によりそって甘たれた口調でねだるように物を言っている。しかし、その甘たれた口調は相手の反応を期待したり、相手の思惑を読んだりすることの全然ない、投げやりなものである。わたしはこういうふうにしなだれかかっているけれど、重くてしびれたら、いつでもすいとおはすしなさいな、というところがある。男の方はといえば、いわゆるやくざな恰好で、髪は首筋のあたりまで長く伸ばしていたし、髭も伸び放題である。しかし、それはよくみれば入念に手入れをしているというこのわかる用意周到なものである。髪はもしやもしやのようだが決して不潔ではない。萎えた感じに洋服を着ていたが、ブラシが行きとど

いていて、適当に折り目があり、靴は光りすぎてはいなかったが上等である。彼は片方の手を女の膝の上に置き、その指をゆっくりと動かしている。男は自分の肩によりかかっている女の髪の上に顎をのせて窓の外を眺める。女のコートのセーブルの黒いふさふさとした毛にまつわる女の髪の匂いを嗅ぎながら、男はぼんやりとした眼つきで彼を見る。競争者としての意識の無い、関心の無い同性に与える、ありふれた机か椅子でも見る眼である。

彼は美しい女を連れている男を敵意を押しかくした眼で見返す。と同時に、自分をその男にすりかえて、あの女の肩をすい、とはずしてやったら、とか、あのわざとらしく、何げないふうをよそおって心持ちあけているふつらとした女の唇の中に足の拇指を突っこんでやったら、などと考える。あのねそべった黒い貂は名前を呼んでも気が向かなければ返事もせずに知らん顔をして薄眼をあけて睡っている動物である。だが、おれがあのやわらかな唇に足の拇指を押しつけければ、あいつはぎゃっと言うさ。あの女の歯の先はぎざぎざだ。あり姉がそうだった。女の唇は魚のように不気味で、そっぱ向いて眼を閉じなくなることもある。恥知らずで、男を消え入りたいような気分させる。女が目の前に居ないときは途方もない甘美な絵がひろがるが、実際に抱きしめると、わびしい裸の電球に両手をあてて暖をとる気分だ。あり姉だって、最初の頃は少しのいたみもない、歯を立てるときゅつと鳴る硬い果肉という感じだったのに、長びいた年月の中で爽やかな香りは消えて、おれの歯の内側には渋だけがいっぱい残っている。墓の中に入ってしまったありを土の中に横たえようと、足の指

のかたちまで一本一本記憶している筈なのに、さて大きな画用紙を前にして鉛筆を持っても、大人の脳の構造を描けと命令されている幼稚園の生徒みたいなものだ。――口の中にいっぱい血まめができてゐる。彼はありの白いはぎを押しやった。それは重い振子のように、押しやってもまたゆっくりと戻ってきた。

「ほうら、氷河が見えます」パイロットが言った。「この氷河は過去三百年に亘って一年に四米ずつ後退しています。ところが、ある地質学者の説によると、それが今年あたりから逆に前進し始めるのだそうです。つまり、そういうことになる」と地上は再び氷河に蔽われ始めるのではないか、ということになるわけです。しかし、かりにそれがほんとうにしたって、氷河がわれわれのところまでやってくるのは何万年も後のことになるわけですから、そんなことを心配する必要はありませんけどね」

パイロットは観光のガイドも兼任しているらしく、低く迂回して氷河のきり立った蒼さを三人に見せてくれた。コバルト・ブルーとエメラルドのインクをしみこませた大きな浮氷が河口の湖に沢山浮かんでいた。縹渺として横たわる巨大な氷河の兩岸には灰色の乾いた岩地が斜めになだれるように続いていた。飛行機は再び舞い上り、なだらかな雪の山の尾根に沿って飛んだ。かと思うと、パイロットはまるで今にも飛行機の翼が岩壁にぶつかるとはなにかと思うほどに谷間の中に突進したり、かと思うとぐいと頭を上げて谷間から空に抜け出たりした。セーブルの女はおびえたような、わくわくしたような仕種で男にしがみついていた。

た。パイロットはわざとのんびり後をふり向いて、そんな女の様子を愉しんでいた。「何時だったか、ちょっとよそみをしていて、翼を木のとっぺんですったことがありますよ」パイロットはわざと女にきかせるように言った。こういったサーヴィスは女にだけ向けられているもののように、彼は谷間でひとの氣を読みながらよそみ運転をしているパイロットを憎んだ。

「ほら、下を見てごらんさい。大鹿の群が走っています」パイロットは言った。雪の尾根づたいに走る大鹿の群は数百頭はあろうかと思われた。「こいつは年がら年中、たえまなく動きまわっている動物です。今、その草原でのんびりと草を食んでいたかと思うと、二、三時間後には彼方の丘を駆けおりている。まるで丘がなだれ落ちてくるみたいですよ、そんなときは。そうかと思うと、河が突然せきとめられたみたいだ、——奴らが河を渡るときは。大鹿の群はいつ、なんどき、どこにあらわれるかわからない。昔から大鹿の群の大移動を言いあてる予言者は居ないというほど奴らには氣紛れな放浪癖があつて、二、三時間とひとところにじっとしちやいません。囲いの中に閉じこめて飼育しようとしても、この持つて生まれた放浪癖のため、一日も置くと氣が立ってあばれまわり、四日もすると体内の新陳代謝に異常を起し、肉がひどく臭くなつて食べられなくなるんです。仔鹿は生れおちるとすぐ母親の後にくっついてよろよろしながら旅に出る。そして生涯旅をして終るんです。

おや、走っているな。何かに追いかけているんだ。後を見てごらんさい。きつと狼

か熊か山猫がいる」

小型飛行機は客に見せるために大鹿の群の直ぐ上を鳶のように輪をかいて低くとんだ。

「熊よ、熊よ。金色の熊です。ほら、陽に輝いてまぶしいほどに光っています」セーブルのコートを着た女が座席から立ち上って叫んだ。

なるほど、大鹿の群の後に金色の毬がはねながらころげるようにならだを丸めて、雪をける四本の脚を高く宙でぶつけるほどに全速力で走っている熊がいた。彼は肥った熊がマラソンの選手である大鹿の群を追いかけてそんなに速く走れるものだとは知らなかったので、どうなることかとこの競走をみつめた。

「ああ、一頭遅れる。ああ、遅れてしまう。少しみんなより小さいわ。きっと赤ん坊の鹿なのよ。ほら、ずんずん遅れちゃう。ああ、あの赤ん坊の鹿が犠牲者になるのだけ」

セーブルの女は黒い皮の手袋をはめた手で両の眼を蔽わんばかりにして、しかし、その指の間からじっとその遅れた仔鹿をみつめていた。

「そうですか。じゃあ、そいつが犠牲者だなあ。きっと、生れてから一日か二日なんだ。鹿は生れて一週間もすれば立派に大人に伍して走れますからねえ。随分運の悪い仔鹿だなあ。そんなときに熊に出くわすなんて。鹿達にとって一番まきやすいトンマの敵は熊ですからねえ。普通三十分も追いかければ熊は諦めて、野鼠でも探そうかということになるんです。生れたばかりの赤ん坊でもなけりゃ、トンマの熊につかまる鹿なんか居ませんよ。熊はその野

鼠だって滅多につかまえられやしない。折角穴をみつめて、出口と入口を気ぜわしく往ったり来たりしては、不器用に穴を前脚で押えちゃ鼻をくつつけて匂いをかぐんですが、鼻をくつつけすぎているうちに、鼠はぴんともうひとつの穴からとび出して木の上に這い上ってしまふ、という具合です。そのトンマの熊がひさびさに、運よく赤ん坊鹿をとつかまえたとなれば、熊のために祝福してやらなきゃなりませんよ」

大鹿の群は走りつづける。一番前は雌鹿、真中が仔鹿、しんがりが雄鹿で、雄鹿のはり出してゆれる角の下でふくれ上った首のまわりの銀灰色の毛が陽に輝く。遅れた仔鹿をかばうように二、三頭のしんがりの雄鹿がいくらか歩調をゆるめたが、それもわずかのためらいのようなもので、仔鹿は置き去られた。

セーブルの女が黒い皮の手袋をはめた手で、今度こそはほんとうに顔を蔽い、うつぶしたので、パイロットは氷河の河口に向って向きを変えた。湖の水が白く輝いていた。飛行機は着水のためゆっくりと頭を下げ始めた。湖の一部に細長く霧が残ったところがあり、その低い霧を下から覗きこむような恰好で飛行機は湖に着水した。霧の中から島影が浮き上り、白い小さな砂浜が見えた。砂浜には着水した飛行機が這い上るほんの二、三十米のコンクリートのスロープだけの小さな飛行場があった。島の森の緑は湖の周囲のずっしりと重い原始林にくらべて緑の色が浅く、針葉樹の林の裾には広葉樹の灌木がかなり混っていた。

飛行機がとまって、彼はゆっくりとコートの前などを合わせている連れの二人を残して行